

特別寄稿

駿河台大学での15年間を振り返って

吉住知文

はじめに

2003年4月に駿河台大学に奉職して15年が過ぎ、退職する運びとなった。駿河台経済論集に退職に伴う特別寄稿の機会をいただいたので、本学での15年間の教員生活を振り返り、ささやかながらその足跡を記録として残したいと筆を執った。

〔1〕駿河台大学へ

大学の教育学部卒業後、広告代理店に3年間勤務した後、半年間ヨーロッパ、北アフリカ、西アジア～東南アジアを旅行し、1975年から28年間埼玉県立高校で地理を中心に教育に携わった。その間、経済学の修士課程、博士課程で学ぶとともに、大学で地歴科教育法を教えるという機会も得た。2002年に通信制高校から12年ぶりに全日制の高校に移ったが、自分の高校生時代のイメージから高校教育に携わりたいと思い教員になった筆者にとって、今の高校生はそのイメージとかなりギャップのある存在に思えた。大学で教えた経験から、むしろ今の大学生が筆者の高校生イメージに近いと感じていたこともあり、この異動を機に大学の教員を目指そうと強く考えるようになった。折しも同年6月頃、駿河台大学経済学部の教員公募があり応募した。教職科目を主に担当するというので、筆者の経歴とも最も合致する仕事内容に思われた。9月の模擬授業と面接を経て、幸運にも採用が決まった。おそらく、学生参加型教材のワークシートに自分の考えをまとめた後グループディスカッションするという模擬授業の展開から、駿河台大学の学生にマッチした授業が行える人材と捉えていただけたためであろう。

思えば駿河台大学とは不思議な縁である。私が高校の教員であった1992年9月、埼玉県高等学校社会科教育研究会地理部会が主催する、入間・所沢地区の巡検に参加した。記憶によると、仏子の入間川で埋没林やアケボノゾウの足跡化石等を見た後、今のカインズホーム裏にある日豊鉱業（確か日本で唯一の亜炭採掘所）を訪問した。その後、昼食会場に新しい大学の施設をお借りしているとの巡検担当者の説明があり、着いたのがなんと駿河台大学で、第二講義棟15階のバンケットルームであった。そこからの入間川のすばらしい展望、美しい芝生のキャンパスやモダンな建物、森林に囲まれた心安らぐ緑の自然環境に関心し、こんな大学で学べる学生は幸せだな、などと思ったのを今も鮮明に覚えている。ちょうど10年後に、そこへの入職が決まるとは。

採用決定後が大変であった。共著本の下稿執筆、インド関連の科研の研究会と論文執筆、日本地理学会のシンポジウムの発表準備、駿河台大学のシラバス作成と授業準備などなど。それらをなんとか仕上げ、3月に研究室に荷物を運び込んだ。これまでに見たいずれの大学の研究室よりも広く設備の整っていることに驚き、高校とは全く異なる研究環境に心が躍った。最後に高校教員の友人たちによるいくつかの送別会に送られて駿河台大学に異動した。

〔2〕入職1年目

2003年4月7日の辞令交付前の1日より教職課程ガイダンスや学部ガイダンスがありそれが初仕事であった。着任当初困ったのは、会議や事務、他の教員との会話でわからない言葉が飛び交うことである。通信制高校に異動した時に同じ感覚を持ったのを思い出す。高校の担任のようなFA制度があるのも不思議であった。始まってすぐにFAとしてオリエンテーションキャンプにクラスの学生を引率したが、先輩学生がかなり関わってくれるので、高校の担任との違いを認識した。キャンプが終わって大学に帰る途中、携帯電話が鳴り、病院から母の危篤を知らされた。認知症を患い、特養に申し込んでいたが空きがなく、心臓も悪いため介護病院に入院していた。駆けつけると、呼びかけには少し反応するものの、意識は混濁した様子であった。それから4日後の2003年4月14日に亡くなった。苦勞の多い83年の生涯であった（父は1999年に死去）。

初年度の担当科目は、プロゼミ、演習Ⅰ、教育学演習、経済地理、教育方法

論、共生社会論、社会科教育法、総合演習、社会科地歴科教育法Ⅰで、最初の4つが通年、他が半期科目であった。前年度にある程度授業テーマの研究と教材作成をしていたが、高校だと授業はせいぜい2科目多くても3科目であるが、ここでは9科目ということで授業準備は相当大変であった。プロゼミと総合演習を除いては定年まで担当した。プロゼミは2年目から地理学概論が増えたので担当を外れ、その後担当したのは1度だけである。総合演習は「総合的な学習の時間」（以下総学）を担当するのに必要な視野と展開スキルを身につけるための科目であるが、後に教職の必修から外れたためコマ数減となり担当から外れた。この授業では総合演習の位置付けと総学について説明し、次いで年度毎に学習指導要領に示された総学の例示テーマを決めて、そのテーマに関わるビデオを見せる。その間、学校HPで総学の実践例を調べて、関心を持った実践例をレポートにまとめて発表させる。また年度テーマに関わる自主研究を行い、総学での指導の観点をに入れてレジメにまとめ発表させた。初めてのゼミも5名が入り、手探り状態で実施した。翌年彼らが卒業する時に「先生がゼミ担当で本当に良かったです」と言ってくれた時は大学に移って良かったという思いを新たにされた。なおゼミも含めて授業実践の詳細は後述する。

授業以外では、教職専任教員としての採用だったので、教職課程委員会に所属し、2012年の在外研究時と退職年度の特任身分による委員会活動免除以外は全て教職課程履修生の指導を担当した。初年度は見習いといった感じであったが、これからの指導に必要なことは全て見学したりおこなったりした。教職課程ガイダンス、介護等体験直前指導、教育実習直前指導、教育実習協力校（飯能市内の小中学校）挨拶、課題発見実習校訪問（千葉）、教育実習校訪問（群馬、福島、福岡）、介護等体験実習校訪問、教育実習報告会、介護等体験事前指導（9回）、委員会以外の教職課程専任教員打ち合わせ（4回）、課題発見実習事前指導、介護等体験情報交換会、教職科目等履修生面接、教育実習協力校情報交換会、教職課程科目会議（非常勤講師打ち合わせ、懇親会）、教員免許授与式。初年度は教育実習Ⅰ（15時間）がなかったのでこれだけですが相当な仕事量であることを認識した。とくに教職課程の仕事が、教職課程主任を中心に、教職課程専任（当時は3人）に偏重していると思われた。

教職課程委員以外に、教務委員と共通科目教務委員、入試の地理の作問も担当した。作問では、単に知識を問う問題だけではなく、持っている知識を応用

して考えて答える問題も取り入れるように工夫した。初年度の印象は、大学は想像以上に多忙だということであった。また地域との共生を目指す「駿大・地域フォーラム」のメンバーにもなった。地元さまざまな仕事や経験をお持ちの人たちと大学の教員がメンバーで、研究会や研修旅行をおこなうとともに、後には大学の森林プロジェクト、インターンシップ、駿輝祭などにもご携わっていただいた。多くの新たな人との出会いがあり、とても勉強になったし、自分が住んでいる地元よりもこちらの人たちとの関係の方が遙かに深くなった。大学と地域をつなぐ大きな役割を果たしたが、2015年度で残念ながら会としての活動を終えた。



図1：研究室のある第二講義棟 12階から 図2：駿大地域フォーラムで気仙沼の畠山重篤さんの牡蠣養殖場を訪問（2008年）
の富士山（中央左の白い山頂）

[3] 教職課程運営

1) 教職課程主任

2006年度に教職課程主任に任ぜられ、以後在外研究の2012年度を除いて2014年度まで、8年間主任として教職課程の運営に携わった。概ね従前のやり方を踏襲したが、極力全委員の合意を得ての運営を心がけた。また、関東私立大学教職課程連絡協議会（以下関私教協）や全国私立大学教職課程連絡協議会（以下全私教協）の部会や総会、研究会に参加して情報を収集すること、兼任講師を務める他の二つの私大の教職課程運営の情報を集めること、教職担当の非常勤講師の確保等に意を用いた。関私教協では教育実習部会に登録して、教育実習に関する高校側へのアンケートによる実態調査、意識調査などを実施

し、実習生を送り出す方の大学へのアンケート調査も行って分析した。定例会では、教職課程運営に関して情報交換もおこなった。全私教協では、ほとんどの大会に出席して、教職課程に関する政策動向の情報収集や、他大学の取り組み状況の情報収集をおこなった。これらの活動は教職課程運営に大いに役立ったが、負担も大きかった。

2) 保健体育の免許課程設置

2008年に現代文化学部の改組による保健体育の免許課程の申請と、心理学部の新設による中学社会、高校公民の免許課程申請をおこなうことになった。新規の課程申請では、学部の教育理念と教職課程設置の趣旨、教育実習計画、科目のシラバス、教職課程履修計画など、膨大な量の書類を作成しなければならない。それに加えて保健体育では、事前指導で今まで同じ学科で英語と保健体育の免許課程を認可したことがないとのことで、認可に至るまで文科省とかなりのやりとりをし、学内的にも多くの調整を強いられた。たとえば、教科に関する科目は、教育職員免許法（以下教員免許法）では20単位以上とされているが、30単位以上の必修科目の設置と修得が課された。つまり実質的に英語と保健体育の免許の両方を取得できないようにする措置である。ともあれ両者とも無事認可された。その後社会科系、情報、英語の教職課程履修者が減少し、本学の教職課程は保健体育免許課程履修者が主流となった。それに伴い、その学生を指導するために教職課程専任教員を増やすことになった。

3) 経済経営学部設置に伴う教職課程申請

2013年に経済学部を経済経営学部に変更することになった。本来は学部名称の変更と若干のカリキュラムの改訂なので、いわゆる再課程申請でよく、ほぼ従来通り認められるのが通例である。しかし学部の意向で、新学部設置とした方が、入試関連雑誌等で取り上げられることが多く、学生募集に有利との判断で、新規の教職課程申請をおこなうことになった。教職課程の設置や申請は学部業務なので、筆者は異論を唱える立場にはないが、文科省は新規の課程申請に消極的で、最悪の場合教職課程設置が認められないこともあり得ることを教授会で申し上げた。2012年度は後述のように筆者は在外研究に行くことになったので、上述の申請書類のほとんどと自分の担当科目のシラバス、業績書を3月末までに作成し、渡航直前に教職課程主任や経済学部長らとともに文科省に事前相談に行った。予想したことであったが、近年の経済系学部の課程

申請で認可した例がないとのことで、地歴科の免許課程を諦めざるを得なくなった。

その後在外研究中のイギリスでも多くの書類の作成、訂正や、筆者紹介の非常勤講師へのシラバス作成、訂正依頼などの作業をおこなうことになった。とくに大きな問題は、文科省の段階で業績有りになっていた教員が中央教育審議会教員養成部会（以下中教審）での審査で業績無しとされたり、文科省からの指示で関連業績を追加したにもかかわらず、業績無しとされた教員が出たことである。そのような場合、文科省に理由を問い合わせることも可能だろうが、大学としては文科省による印象の悪化が懸念されるので別の担当者を探すしかない。また筆者紹介のある非常勤講師には、筆者の見立てで明らかに担当科目と関連のある業績を追加記載もらったが不可とされた。筆者はオクスフォードからロンドンへの引越し作業の最中であつたが、教職課程委員会では対応ができないとのことなので、この2名分については筆者の知り合いの現役の高校教師に直接電話し、非常勤講師を引き受けていただいた。その他の申請事務は教職課程委員会でやっていただいたが、文科省からは、学部への意に反していくつかの教科に関する科目を教職課程履修生以外にも必修として設置することや、教職課程を定員が設定されたコース限定とすることなど厳しい条件が課せられた。

4) 文科省による教職課程視察

在外研究を終えて再び主任に任命された2013年6月、文科省の視察を受けることになった。新年度早々膨大な事前報告書を作成するとともに、対応準備のために事務の方たちが、筆者の紹介で前年に視察を受けた大学にお話しを伺いに行った。文科省担当者、地元教育委員会、他大学の教職課程学識経験者（実地視察委員）からなる視察団を、学長以下総勢14名で迎えた。視察では、学内の施設見学、授業見学、会議室での質疑応答、視察団による講評や問題点の指摘などがおこなわれた。経済経営学部の課程申請時には了承されていたものが、改善指示されるなど不可解なものもあつたが、教育実習、体育施設など高く評価されたものもあつた。

5) 駿河台大学教職論集の刊行

教職課程認定において、従来の教職に関する科目に加え教科に関する科目担当者の業績審査も行われる方向にあることに鑑み、業績発表の場としての教職

課程紀要を創刊する必要に迫られた。2015年度、教職課程主任の任を解かれた筆者が担当となり準備に取りかかった。投稿規定を作り、大学の予算も厳しい中、50部のみ印刷することになった。投稿者を募集し、5本の論文が集まり、2016年2月29日に第1号を刊行することができた。その後、本学のリポトリへの登録が決まり、他の紀要との書式の統一性の関係から、改訂版が出された。



図3：教育実習校訪問



図4：教員免許状授与式

[4] 在外研究

2012年度、1年間の在外研究の機会を得た。筆者の研究領域は植民地期インドのパンジャーブヒマラヤ地域の森林政策史である。2010年、以前にも調査したOxford Forestry Institute（以下OFI）に受け入れを打診するために渡英した。ところがOFIはなくなっており、資料はPlant Science Libraryに移管されていた。その司書の方から教えていただいたOFI最後の所長Jeffery Burley博士に、すばらしい伝統と実績を持つOFIがなくなってしまったのは大変残念であること、小生の研究歴と在外研究の受け入れをお願いしようと来たことなどをメールした。すると彼から、次のような主旨の返事が来た。自分はOFIの存続に尽力したがかなわなず本当に残念だ、あなたが受け入れ先を探しているなら、自分は今Green Templeton College（以下GTC）の名誉教授で、支援できるのでGTCに申請すればどうかと。帰国後、Burley（以下Jeff）さんの助言に従い、Visiting Fellow（客員研究員）の申請準備を始めたところ、3.11震災が発生した。大学でのさまざまな震災対応等もあり、申請準備が遅れようやく2011年5月にCoverletter（申請書）、CV（履歴、業績書）、学長推

薦書を Jeff さん経由で提出した。Jeff さんは GTC の理事たちに働きかけてくれ、6月25日学寮長 (College の長) から昨日受け入れが決まったとのメールが来た。それからは校務の合間を縫って準備を始めたが、一番困ったのは住居である。というのは、Jeff さんからの連絡で、客員研究員用の家族寮は満杯とのこと。インターネットでいくつか Flat に問い合わせたが、外国籍は直接事務所でしか契約できないところが多くなかなか決まらない。直接電話した方がいいかもしれないと思い、かけてみるとある立地条件のいいところが見つかり、2012年の2月に無事契約できた。妻がロンドン大学教育大学院 (Institute of Education 以下 IOE) への留学が決まっていたので、駅の近くであることが必要であった。日本式にいうと2LDKバス付きで家賃は月額1,300ポンド、当時のレートで18万円程度だが、電気、ガス、水道、電話 (インターネット) は別である。後で分かったのだが、高級住宅に相当するため別途住宅税を取られることに。出発までに多くの荷物を国際郵便貨物で GTC 宛に送った。

4月13日渡英、ヒースロー空港からレンタカーでオクスフォードのホテルへ。翌日不動産屋で鍵や注意書等を受け取り、Jeff さんが待つ GTC へ行き、荷物を受け取るのがかなり少ない。郵便局で聞くと税金がかかるので、オクスフォード空港近くの Parcel Force に行けとのこと。Jeff さんと行き、これは生活するために日本から送ったのもので、税を取るのはおかしいと掛け合ったが、後で払い戻しが受けられるのでとりあえず税金を払えとのこと。とりあえず着ている荷物を受け取り St. Thomas Muse という契約した Flat に。70歳を超えた Jeff さんが、3階までの荷物の運搬を手伝ってくれた。Jeff さんはオクスフォード大学で林学を修め、アメリカのエール大学で林学の修士と博士を取得した俊才で、国際森林機構、英連邦林業協会、イギリス・アイルランド硬木トラストなどの会長、その他多数の国の森林アドバイザーを勤めた林学の世界的権威である。にもかかわらず偉ぶるようなところは全くなく、とても世話好きで、ユーモアがあり、困っている人には親身になって考え、常にレディーファーストで、小生がこれまでに会った最高のブリティッシュジェントルマンである。こうしていよいよオクスフォード生活がスタートした。

生活と研究の体制が整った6月下旬から毎日、旧 OFI の収蔵資料を引き継いだ Radcliffe Science Library (以下 RSL) で、マイクロフィルム化されたインド森林政策関連の資料をフィルムスキャナーで1頁ずつデータ化していく作業

をおこなった。昼はRSLから700mほどのGTCに行き、そこの旧天文台を改造したバンケットホールで昼食を食べる。教授と相談しながら食べている学生がいるが、これは教授と学生との個人的な関係を通じて教育をおこなうという伝統を受け継いだもの。筆者は約30万の客員研究員費を払ったが、それにはこの昼食代が含まれている。セルフサービスであるが、前菜、スープから始まってデザートまで付いたフルコース料理で、しかもとても美味しい。レストランでフルコースの昼食を食べると最低でも2,000円以上はするので、ここで1年間昼食を食べると30万円分以上になる。GTCは、1970年代に医学・薬学系のGreen Collegeとビジネス・社会科学系のTempleton Collegeが統合して生まれた新しい大学院大学である。キャンパスは旧天文台の建物や敷地を用いており、中には200年以上を経た建物もある。キャンパスは狭く、こじんまりとしたアットホームな雰囲気のカレッジである。

水曜日には都心のバスステーション裏の広場で朝市が開かれ、オクラ、隠元、大根、茄子、キュウリ、ねぎ、生姜など日本でもよく使う野菜やイチゴ、グレープフルーツ、ブドウなどの果物が、日本の半額ぐらいで売られており、毎週1週間分を買い入れたが、味は日本産に及ばなかった。近く中華食材店では味噌、梅干し、米、米酢、醤油、胡麻油などの和食材が入手でき、他は近くのスーパーで買って食事を作った。

研究の合間を縫って、地理の教材収集をかねて北イングランド、スコットランド、南ウエールズ、南イングランド、アイルランドなどを旅行した。6月3日にロンドンで行われたエリザベス女王在位60周年記念式典行事のテムズ川船行進、オクスフォードに来てくれた会社員時代の同僚が手配してくれたチケットで、ロンドンオリンピックの陸上競技を見ることができたのもののいい経験であった。

9月末、筆者のオクスフォードでの資料収集がほとんど終わったのと、妻のIOEでの授業が本格的に始まるので、客員研究員のままロンドンに引っ越した。幸いIOEが大英図書館に近く、ラッセルスクウェア一駅からも近いロンドン大学の家族寮に入ることができた。1LDKに納戸が付いた部屋でバスタブこそないが、電気、水道、インターネット、暖房込みで月額17万円と破格の料金である。ただ築200-300年とのことで、天井まで5mほどあり、冬はかなり寒く、電気ストーブと借りたオイルヒーターでしのいだ。

ロンドンでは毎日大英図書館に通い、India Office Record (旧インド植民地省所管文書)の資料を調査し、CDに焼いてもらう作業をおこなった。以前にインドやイギリスで収集したものを合わせると、植民地期インドのパンジャブ地方の森林政策関連では、日本では最大級の資料収集ができたと思う。日常生活では、妻は授業準備が大変なので家事はほとんど筆者がおこなった。近くに大きなスーパーマーケットと含むショッピングセンターがあり、その向こう側に和食に使う野菜を扱う店があったし、ピカデリーサーカスには日本食材店があったので和食もよく作った。ロンドン在住時で印象に残るのはロンドン大学の創立記念日(11/28)で、名誉博士号授与式後学長のアン王女が学生と会話する催しがあり、妻も列に並んで王女と言葉を交わした。12月には大学の幹旋でホームステイした。受け入れ先はロンドンから電車で30分ほどの、Hemel Hempsteadというニュータウンの退職医の方で、ナショナルトラスト(NT)が管理するAshridge Estate林や、同じくNTが管理するクリスマスイルミネーションで有名なWaddesdon Manner Houseに連れて行って頂いた。ロイヤル・アルバート・ホールのボックス席で聞いたクリスマスコンサート、1月にPalace Theaterで見たミュージカル「雨に唱えば」もロンドンならではの経験であった。在外研究は筆者の人生の中でも最も貴重な1年であった。機会と研究費をいただいた大学、不在の間ご負担をおかけした教職員の皆様に謝意を表したい。



図5：オクスフォード大学グリーンテンプルトンカレッジ



図6：ロンドン大英図書館

[5] 授業

ここでは、担当した授業について振り返る。一般的にいうと、教職に関する科目はアクティブラーニング（以下 AL）形式で展開した。これは、1995年にある大学で初めて社会科学系教科教育法を担当してから一貫している。当初は、ほとんどの受講生がこのような形の授業を受けたことがなく、グループディスカッション（以下 GD）で、他の学生の意見を聞いて新たな発見がありとてもわくわくしたといった感想も多くあったが、中には、このような展開手法は面白いかもしれないが、受験対策に追われている現場で実践するのは不可能でないかという受講生もいた。しかし次期学習指導要領ではALが必須となり状況は大きく変わった。

教職に関する科目以外の講義科目では、あまり理論に深入りせず、事例を中心に扱い、小課題を設定してワークシート（以下 WS）で考えて発表させたり、発問して指名し答えさせたりしてインタラクティブな授業を目指した。プロゼミや専門演習では構成的グループエンカウンターも取り入れた。

1) プロゼミ

ここでは2度目に担当した2015年度の内容を紹介する。最初は他己紹介である。事前に課題として次のようなWSを完成させる。氏名:生年月日:出生地:高校の所在地と公立・私立の別:高校で加入していた部活動:高校で得意だった科目:高校で苦手だった科目:勉強と部活動以外で、あなたが高校時代に最も力を入れたことは何ですか、なぜそれに力を入れたのですか:あなたが持っている最高の宝物は何ですか。それはなぜあなたにとって宝物なのか:外見や普段付き合いでは想像できないような、あなたの特技や特異な体験は何ですか:あなたの日常生活、行動の仕方、考え方で最も大切だと考えていることは何ですか、理由も教えて下さい:あなたにとって自分らしさとは何ですか:今までで、最も嬉しかったことと悲しかったことは何ですか（悲しかったことは省略可）:あなたが大学の4年間で最も力を入れたいことは何ですか、その理由も教えて下さい

次のような指示をする。ペアになってWSに沿ってインタビューし、彼（彼女）のことをみんなに紹介して下さい。ポイントは相手のことをよく知ろう、よく理解しようと努力し、こんな考え方、個性を持った人なんだということが

よく分かるように、印象深く紹介することです。具体的にやることは、相手からしっかり聞き取りし、少しでも分からないことがあれば分かるまで尋ねる。ただし、聞かれる方は、話したくない場合はその旨伝える (15 分)。聞き取ったことを、どのように話せば相手のことをよく理解してもらえるか、また印象深くなるかをよく考える (5 分)。相手に再度尋ねてもよい。発表 3 分。グループで、誰の紹介が、どんな点で最も印象に残ったかを話し合う。

次におこなったのは、「無人島に移住する」である。我々はある事情から、熱帯地方の無人島に移住せざるを得なくなりました。島の大きさは直径 10 キロメートルほどで、午後にはほぼ毎日雨が降り、気温は年中 20 度～30 度です。島には木が豊富にあり、植物はよく育ちます。人間を襲う動物はいません。持って行ける物は全部で 10 個です。まず個人で持って行くべきだと思う物 5 個をカードに書いてください。カード 1 枚に書くのは 1 つだけです (15 分)。司会者が中心となって、それらを合わせて検討し、実際に持って行くべき 10 の物を決めてください (20 分)。それらの 10 の物を、A 不可欠品 (無いと生きていけない)、B 無いとひどく不便、C あるに越したことはない、に分けてください (15 分)。今日やったことから、分かったこと、考えたことをまとめてください (10 分)。

そのほか、NHK の「テストの花道」で紹介された、「情報を読み解く」(大工の A さんには弟の B さんがいます。ところが B さんに、「あなたのお兄さんは大工ですね」と訪ねたら、「いいえ兄は漁師です」と答えた。どうしたことでしょう) や、将来の仕事を考える (トーナメントによる進む道発見) などをグループで考えさせたりしたが、それらもグループでおこなったのでエンカウンターになっている。

読んで自分の意見をまとめるでは、「シャルリー・エブド」事件に関連して、完全な表現の自由の主張と、パラダイムの違いの認識の上で共存を図るべきことの主張を紹介した新聞記事を取り上げ、それぞれの意見の主旨を、違いが分かるようにまとめ、それを参考にしながら表現の自由に関する自分の意見をまとめる課題を課した。事件のビデオ、掲載写真を提示し、用語解説も行って実施したが、少し難しかったかもしれない。

ビデオを見て自分の意見をまとめるでは、満蒙少年義勇兵のドキュメンタリーを見て、制作者が何を訴えたかったか、これから何を自分は何を学んだのか

を考えさせた。戦前の言論統制や教育への国家の介入が、このような悲劇を生んだことを学んでほしいと考えた。



図7：プロゼミ学部デー（日本銀行）



図8：地理学概論で周辺巡検

2) 演習Ⅰ，Ⅱ

いわゆる専門ゼミで、2003年の着任から2015年まで担当した。テーマは「仕事をし、生きていくためのアジアと環境を考える」であったが、それにこだわらないということにしていた。Ⅰではエンカウンターをおこなった後、環境問題やアジア理解の導入を行い、テキストを決めて輪読発表をおこなう。後期は卒論テーマを決めるための個人研究をおこなう。Ⅱでは卒論作成のための個人研究を行い、後期はもっぱら卒論指導をおこなった。1，2年次科目を担当してなかったので、筆者の授業を知る学生がいなかったせいか、受講生は多くて7-8人少ない時は3-4名であった。毎年のように教職課程履修生がいて、卒業後非常勤や臨時採用の教員になったものも何人かいる。ただ、筆者としては、教職課程の担当履修生を学年持ち上がりで卒業まで4年間指導するため、ゼミ生よりも教職課程履修生の方が繋がりが強いというのが実感である。

3) 多文化共生論（当初は「共生社会論Ⅱ」）

就任から2016年度まで担当。多民族社会に必然的に移行する日本において、人々が対立するのではなく、共生するための考え方や方法をしっかりと学ぶことを目的とする。他の講義科目でもそうだが、プリント教材をワープロで作成し、その中にハイパーリンクを貼って画像や動画をプロジェクターで提示するという方法を採用し、プレゼンソフトは使用していない。プリント教材の最初に【メッセージ】を記載する。これは授業目的でそれを筆者はメッセージとら

えている。「このことを理解してほしい、このことを知ってほしい」というメッセージを、教えるのではなく、教材を通して学び取らせるのが授業である（後述参照）。次に【スキル】を記載する。これはこのテーマの授業の終了段階で、実際に受講生にできるようになったもらいたいことで、これが試験で問われることになる。このように、新しい授業テーマに入る時に、授業目的と目標を明示することは授業の基本である。

授業内容は①文化とはなにか:文化に優劣はあるのか②人種とは何か:人種主義、ヒトラーの場合③民族、エスニシティ:自民族中心主義のわな④分離と対立の諸相…歴史から学ぶ(1):ヒンドゥー対ムスリム(インド)⑤同(2):パレスチナ問題⑥分断と共生:カースト制⑦同化政策から統合政策へ:シンガポール, EU⑧積極政策:被抑圧者優遇制度は逆差別か(インド, アメリカ)⑨多文化主義:オーストラリア, カナダの場合, である。

インタラクティブに進めるため、自分で考える課題を設定して、発表させるというやり方をほぼ毎時間取り入れた。たとえば「文化とは何か」の授業では、次のような文を読んで「異なる文化と出会ったときに採るべき態度と、その理由について、この文章を参考に考えをまとめなさい」。

異文化接触

人が自分が生まれ育ったのとは違う文化と出会うことを異文化接触といいます。海外旅行をしたときなどが典型的な例です。ここでいう文化とは、生活様式や生活用具、宗教、考え方などを指し、文学や芸術などのような抽象性の高いもののみを指すものではありません。さて人が異なる文化に接したときに何が起こるでしょうか。人間が始めてのものに出会ったとき、それが自然であれば次のように反応するでしょう。例えばヒマラヤへ行って自分が今までに見た山よりはるかに高い山を見れば凄いなあと、その山に登ってマイナス30度の寒風に吹かれれば脅威を感じます。ところが対象が文化の場合、もっと違った反応も生まれます。たとえばヒマラヤ地方にすむチベット系の人達が、自分の死んだ家族の骨まで砕いて鳥に食べさせる鳥葬を見たときに、多くの日本人はとんでもない死者への冒瀆だと思うでしょう。ところが彼らは次のように考えています。肉体と魂は別のもので、魂はある肉体に仮に宿っているだけで、それが滅ぶとまた別の肉体に宿ることになる。したがって死体は単なる物体に

過ぎず、それは完全に自然に返さなければ魂は別の肉体に宿れないと。

この違いはなぜ生じるのでしょうか。自然は普遍的な自然法則に基づいて作られ、しかも自然そのものが価値の尺度を持っているのではなく、個人が価値の尺度を持っています。自然に対する個人の価値の尺度は比較的単線的なので、一見して価値の位置付けが出来ます。ところが対象が文化の場合は、文化自体の中に価値の尺度があり個人も同じ尺度を持っています。異なる文化は異なる価値尺度を持っているのに自らの文化の価値尺度で計ってしまうため、上のような現象が起こります。

今日の国際化の時代にあって多くの人が海外に出かけ、また多くの外国の人が日本に旅行や仕事にきています。つまり異文化接触の機会が増えています。そのとき異文化に対する正しい理解がないと、誤解や偏見が生まれます。正しい異文化理解のためにはまず文化には全体としては優劣はないということを理解する必要があります。文化とは社会や環境に対する適応の仕方として生まれたものですから、文化の違いはあくまでその仕方の違いに過ぎないのです。たとえばインドの人達は手で食物を食べますが、これを衛生観念のない未発達な文化と考えることは誤りです。彼らは食事の前にはもちろん丁寧に手を洗います。そして彼らは、「自分たちは指で料理をまず味わう。箸やフォークを使う人は味覚を損なっているのではないか」と言います。つまり指を味覚器官の一部としているのです。日本料理において、料理や器の配色に気を配りますが、それは目を味覚器官の一部にしているのからに他なりません。もちろん他の文化の中に、より適したものが存在する場合がありますが、その場合、そのを取り入れて自らの文化をより豊かなものにします。そして多くの場合、逆にこちらの適切なものが、相手の文化に取り入れられていきます。日本が洋服や床生活など、欧米の生活様式を一部取り入れるとともに、欧米で豆腐や寿司などの食文化が取り入れられています。つまり全体として、日本文化と欧米文化のどちらがより優れていたかということとは言えないわけです。

このことから、われわれが異なった文化に接したときは、自らの文化に基づいて価値判断することを避け、相手の文化の側に立って、その文化が、どのような考えから生まれてきたのかを理解するように努めるべきです。(以下略。吉住知文、『異文化接触』未発表論考より)

「ヒンドゥー対ムスリム」では、ムガル帝国のアクバルが、ヒンドゥー、ムスリム宥和政策を採って社会が安定し、イスラム・ヒンドゥー融合文化が生まれたこと、後にアウラングゼーブによるムスリム優遇政策で反乱が多発して社会が不安定化し、それにつけいられて植民地化が進行したこと、イギリスによる独立運動分断政策によってヒンドゥーとムスリムの対立が激化し、数十万人の死者と1500万人の難民を生む分離独立に至ったこと、1990年代に政権を獲得したインド人民党は、ヒンドゥーとムスリムの仲裁に奔走したガンディーを暗殺したヒンドゥー至上主義組織の流れを汲む組織を配下に持つ政党で、ムスリム排撃の政治扇動によって政権の座に就いたことなどを、史料に基づく課題を通して学んだ後、この歴史から何を学ぶのかを考えさせた。そのメッセージは、「表面的には宗教対立に見える大規模な民族対立の根本的な原因は、多くの場合政治扇動であること、宗教的対立を煽る政治は社会を崩壊させること、政治扇動を見抜く洞察力と識見を持つ必要がある」ということである。

「パレスチナ問題」では、紀元前数千年から始め3コマをかけた。民族問題の多くは極めて複雑で、場合によりこのように数千年の歴史が関わるものもある。ここではユダヤ教の思想（とくに選民思想、律法主義）、キリスト教（とくに博愛主義、平等主義、主体的生き方）、イスラーム教（とくに神の元の平等、聖典の民、ユダヤ教との類似）、シオニズム（とくに独善性、イスラーム蔑視、帝国主義との同盟）を史料に基づき学んだ後、第一次世界大戦以降のパレスチナの歴史、現在のパレスチナの状況を資料とワークシートで学ぶ。そのメッセージは「エスノセントリズムの強い抑圧された民族が権力を握ると抑圧する側になる、平等思想を持たない宗教は世界宗教にはなれない、世界のムスリムの怒りの矛先はイスラエルによるパレスチナ人の人権抑圧に目をつむるアメリカのダブルスタンダードにある、帝国主義は人権や約束よりも国家の都合を優先する、パレスチナ問題の本質は君たちの家に大量の見知らぬ人たちが押しかけ、縄文時代に自分たちの祖先がここに住んでいたのだからここに住む権利があるからお前たちは出てけと追い出すのと同じ」ということである。

「多文化主義」では、マイノリティの文化を保護し発展させつつ共生を目指す制度で、この多民族共生の最も進んだ形である多文化主義を推進してきたオーストラリアとカナダを例に学ぶ。オーストラリアでは、たとえばベトナム出身者の多い地域の学校では、ベトナム語やベトナム文化を教えらるる教員を採用

し、ホスト社会（オーストラリア）出身の生徒にベトナム語やベトナム文化を教える。メッセージは、「マイノリティ政策の歴史は、分離、同化、統合、多文化主義と進展してきたが、日本はまだ同化政策段階にとどまっており、多文化主義に移行すべきこと、共生社会は、相手の文化を理解し尊重する教育・社会政策を通してしか実現しないこと、進行しつつあるエスノセントリズムへの回帰の危険性の認識」である。

4) 経済地理 I, II

扱ったテーマは、①世界の農業地域区分…ホイットルサーモデル：なぜここでこんな農業が行われているのか②遊牧と移牧…遊牧と移牧はどこが違うのか。遊牧民はさ迷っているのか③焼畑農業…森林破壊の犯人か環境にやさしい農業か④インドの農業…緑の革命は食糧危機の救世主か⑤アメリカの農業…農業工場？で生産される戦略物資が世界を支配する⑥日本の食糧需給…今朝食べた納豆と油揚げ味噌汁の自給率は⑦世界のエネルギー…石油と原子力の政治経済学⑧工業立地シミュレーション…君ならこの地図上のどこに製鉄所を作る⑨工業立地論…ウェーバーモデル⑩先端産業の立地…シリコンバレーとアジアのコンピュータ産業⑪アジアの工業化…成功は開発独裁のおかげか⑫中国の工業化…市場経済を否定したはずなのに社会主義市場経済？⑬中心地理論（クリスタラーモデル）…なぜ八百屋は近くにあるのに電気屋は近くにならない⑭地球温暖化…22世紀に東京は海の底？⑮熱帯林破壊…われわれも熱帯林破壊の加害者？

理論は算数を使ってモデルを理解できるようにした3つに絞り、もっぱら事例を中心にビデオ、写真、プリント教材を提示し、WS上で課題を考えて発表する展開。たとえば、ある地域でどういう農業が行われるのを決める条件（立地因子）を考えさせたり、ビデオからアメリカの食糧援助の問題点を考えさせたり、原料減損の2局地原料の産出地と市場の位置関係から、鉄鋼業立地の最適地を輸送費の計算から求めさせたり、ビデオ教材とプリント教材から京都議定書の問題点を考えさせたりなど。

5) 地理学概論 I, II

中学社会の教科に関する必修科目である。文科省の指導で2013年度から教職課程ではなく学部設置科目（卒業要件に算入できる）となった。従って教職課程履修者以外も受講できるが、受講生には設置の目的が教員として地理を教

えるための基礎的学力の修得であり、教えるためのノウハウが盛り込まれるし、何よりも教員免許は国家資格で本学の学生ならこの程度の学力でいいということにはならないので単位修得のハードルが高いことを説明。内容は、地誌的アプローチを除く地理学全般である。グループワーク（以下 GW）を行えるように座席を指定、前期の地形の終わりまでは、教育実習での参考になるように板書をおこなうが、以降は地理的知識が不十分な受講生の効率的な学びのため、レジメプリントを用いて進めた。

I では自然が中心だが、地学の地形や気候と異なり、成因や自然的特徴の基本を押さえながらも、人間活動との関係をしっかり生徒に理解させるべきであることを強調。また次のような自然の本質について考えさせた。①自然は不変ではない②自然環境の要素の間には密接な関係がある③自然環境の要素が果たす役割は、社会のあり方や人（階層）により異なる④自然環境の要素の果たす役割は歴史的なものである⑤同じ自然環境であっても、人間の対応の仕方は同じではない。

地形と地図の学習の後、授業で学んだことを目で確かめる、目で見たものを地図上で比定するため大学周辺の巡検をおこなう。気候に関しては、筆者の海外調査に基づく写真や GIS (Geographic Information System) を利用して興味付けし、気候データから気候の特徴を読み取らせる。GW の例は、マグリヤニス（マゼラン）の航海図を提示し、一行が帰国したとき航海日誌の日付が1日違っていたため、かれらの世界一周が疑問視されたというが、日付が1日違っていることが世界一周の証拠だ、なぜか、また帰国は 1522 年 9 月 6 日だったが、航海日誌の日付は何日だったか。

II では人文地理学的内容を扱う。「人種、民族、エスニシティ」は最も受講生の理解が乏しいにもかかわらず、生徒にしっかりと学ばせる必要性が非常に高い分野である。上記多文化共生論と共通する部分も多い。まず人種主義の生まれる背景をゴビノーの「人種不平等起源論」が出版された 19 世紀中頃の world 情勢から考えさせる。次いで、ユネスコの「人種と人種差別の本質に関する声明」を読み、人種主義の科学的知見からの問題点を学び取らせる。民族では、まず文化の英語が culture で耕作も意味することから両者の関係を示し、下図を用いて文化とは社会と自然への働きかけによって生み出されたものの総体（もの、技術、考え、言葉、しきたり、etc.）であること、日本人は洋服、床

生活を取り入れたが、欧米で寿司などの和食が取り入れられていることなどから、文化には優劣がないことを学ぶ。また、上述の異文化接触の教材を用いて、エスノセントリズムの陥穽に陥らないための考え方を学ぶ。最後に民族問題であるが、ここでのポイントは上記の多文化共生論と同じく、表面的には宗教対立に見える大規模な民族対立の根本的な原因は、多くの場合政治扇動であったり、人権抑圧、経済的抑圧であることが多く、他の文化や民族を攻撃するような扇動は社会の分断と混乱をもたらすことをしっかり理解し、それを教員として授業で実践するためのスキルを学ぶことである。開発途上国の都市問題では、学生の理解が乏しいスラムに焦点を当て、スクワッター、スカベンジャー、シャンティータウン、インフォーマルセクター（公式統計に集計されない職種）など、スラムの基本概念を学んだ後、教科書にはスラムのマイナスイメージしか書かれていないが、利点もあることを学び取らせる。最後にマイクロクレジットやNGOによるスラム改善事業などの対策を学ぶ。

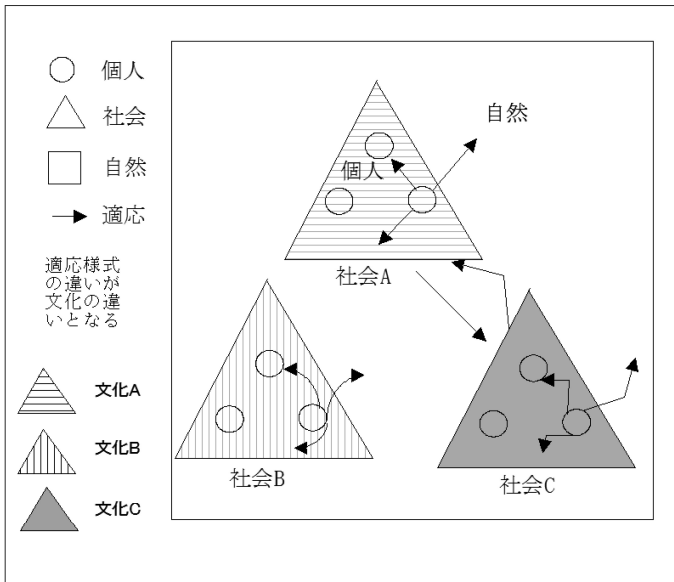


図9:文化の概念

6) 森林文化論

2016年度まで、オムニバスで15回中3回担当した。内容は①世界の森林と森林文化②世界の熱帯林破壊③森林破壊の歴史—植民地インドを例に—。筆者の専門がインド森林政策史なので、まさに専門領域であるが、2007年文科省の現代GPに採択された『駿大の森』百年協定による飯能活性化プロジェクトで始まった科目で、全学で担当するという趣旨から各学部からの担当者によるオムニバスとなった。ちなみに森林実習を中心とする「森林文化実習」という科目も設置され、筆者も何回かお手伝いした。名栗の「駿大の森」や大学の裏山（「駿大の里山」）で、間伐、植林、下草刈り、枝打ちなどをおこなうとともに、里山では散歩道整備、椎茸栽培などもおこなった。

7) 教職論

以下の教職に関する科目は、授業中に携帯を見ていた場合は退出させるなど、他の科目にも増して厳しく指導した。卒業に関わる科目ではなく、学生に教員になるのに必要な力を身につけさせるため科目なので、自分の学力を向上させるのを妨げるような行動を慎むという意識を持たせるためである。無論、自分の授業が興味関心を持たせるようになってきているかを点検した上で。

教職論は前任者の退任を受けて2013年度から担当した。1年次必修科目ということで、筆者担当の教職に関する科目では最も受講生が多かった。教職に関する科目は「教育職員免許法施行規則」に含めるべき内容が規定されており、さらに文科省の指導もあり、自由に内容を決められるわけではない。主な授業テーマは①私が最も影響を受けた教師②教員に求められる資質と能力（ランキング）③教職の意義と教員の役割（先達の言葉から）④現代の教員を取り巻く状況（教育改革、モンスターペアレント）⑤働く場としての学校（校務分掌、誰が決める）⑥教員の仕事（エンカウンター、エンターテイナー）⑦外国の教育の考え方（コンピテンシー、社会構成主義）⑧教育改革⑨教職と他の職業との違い（広告営業マンと教員）⑩教員研修⑪教員になるには、である。このうち①②③④⑥はビデオや資料をもとにWSに記入してGDをおこなう。GDは固定の5-6人のグループで、司会者と記録者を輪番で立て、両者で責任を負って議論を進める。まとめは配布した記録用紙への記載に基づき、記録者が発表するが、両者は自分で疑問点がないように、また議論を分かりやすくしたり深化させたりするような質問をしながら、全員から必ず意見を聞くように指示

する。100人近い受講生の年もあり、その人数でGDするのはなかなか大変で、机間巡視して議論が停滞しないように指導した。ある年に「私が教師を目指す理由」という期末レポートを課したが、32名中4名が教職論を受講して当初と理由が変わった、2名が授業を受けて強く教員になりたいと思うようになったと記しているのので、一定程度目標は達成できたのではないかと（吉住知文、「教職論」の展開と受講生の反応の分析（『駿河台大学教職論集』第1号，2015））。



図10：教職論でのGD



図11：社会科・地歴科教育法ⅠでのGW（遊牧民ゲーム）

8）社会科・地歴科教育法Ⅰ（地理分野）

この科目はある私立大学で1995年から、他大学でも8年間担当しており、大学で最も実践経験を積んだ科目であるとともに、教育に関して筆者が行ってきた研究と高校での実践を最も生かせる科目であった。授業の構成は、下記の通り。

- ①私が受けた地歴科授業
- ②授業作りのポイントと教案の作り方
- ③授業のスキル：話し方、発問、板書、教材作成、授業管理
- ④地歴科の学力とは（1）：ランキング」
- ⑤地歴科の学力とは（2）：事実と原因…男女人口比、スラム回帰、飢餓
- ⑥GIS（地理情報システム）
- ⑦学力を世界一にする授業：「フィンランドのメディア教育」
- ⑧参加型授業展開法（1）：ブレインストーミング（単純知識型、課題解決型）
- ⑨参加型授業展開法（2）：ゲーム…遊牧民ゲーム

- ⑩参加型授業展開法 (3): デジジョンメイキング……工場立地
- ⑪教材を作る (1): 黒板, プリント, ヴィデオ (DVD)
- ⑫教材を作る (2): 実物, 音声教材 (MD)
- ⑬教材を作る (3): コンピュータ
- ⑭ビデオ授業研究 (1): 「イスラム文化圏に暮らす人々」(グループ学習)
- ⑮ビデオ授業研究 (2): 「図から歴史を読む-石山合戦」(ピクチャーランゲージ)

次期の学習指導要領では, AL による展開が必須なので, この授業でもそのスキルを身につけさせるために GD, GW を多用し, さまざまな生徒参加型教材も体験させた。

②では地歴科の授業構成法と教案の作り方を学ぶ。ここでのポイントは, 「授業とは教えることではなく, 生徒に学びとらせるもの」, 何を, 「教員のメッセージ (このことを理解してほしい, このことを知ってほしいという授業目的)」を。教員の頭の中にあるメッセージをどうして生徒が学び取れるのか, 「いくつかの目に見える教材を作成し, それを通して。教材 a で A を, 教材 b で B を学び取らせ, そのテーマの授業の終了時点でメッセージを学び取らせる」。地理で現代的な課題のテーマは, a) 問題の存在を提示する…どこで, 何が起きているのか, どんな問題が起きているのか, b) 問題の様態を明かにする…何が, どのように問題なのか, 誰に, どのような影響をもたらしているのか, 自分たちとどのようなレlevanceがあるのか, c) 問題の原因を明かにする…因果関係などの図式化。直接的な原因と間接的な原因, 表面的な原因と本質的な原因, d) 解決の方法を考えさせる…政治的解決, 経済的解決, 社会的解決, e) 解決のために, 自分の日常生活で実践できることを考えさせる (Think globally, act locally), という構成で展開するとまとまったものになること, 歴史のテーマは, a) テーマの概容の提示…歴史は現在のことではないので, 図や映像等を利用してイメージ化を計る, b) テーマの詳細の展開…資料 (年表, 図, 写真を含む) や史料に基づく教材を提示し, そこから史実を読み取らせつつ展開する, c) テーマの起こった原因, 要因を明かにする…因果関係などの図式化。直接的な原因と, 間接的な原因, 表面的な原因と, 本質的な原因, d) テーマの歴史的意義の考察…場合により, それが起こらなかったら, 異なる方向へ行っていたらどうなったかなども考えさせる (歴史学では扱わない歴史教育の方法論), e) テーマの現代的意味を考えさせる…歴史的な誤

りは、それを繰り返さないために何が必要か、問題が解決した歴史的な教訓は、現在のどのような問題の解決のためのヒントとなるのか、という構成で展開するとまとまったものとなることを学ばせる。

社会科のテーマにおけるメッセージは、自分なりのものであることが重要で、それは深い教材（学問）研究によってはじめて生まれること、それは歴史教育においてはそのテーマの歴史的意義であることを強調する。これまで、地歴科教育法を担当してきた3大学で必ず毎年学生に問うているが、ルネサンスの世界史的意義を答えられた受講生は感覚的には5%以下である。つまり、ほとんどの高校の世界史の授業では、その歴史的意義の理解を授業目的にすえ、テーマの授業が終わった時点で生徒が、ルネサンスは世界（ここでは直接的にはヨーロッパ）の歴史の中ではそういう意義があったのかと理解できるような授業が行われていないというということである（吉住知文、「社会・地歴・公民の授業作り－授業目標、教材研究、授業構成－」『國學院大学教育学研究室紀要』47号、2013参照）。

教案の作り方では、1時間の授業作りを学ばせる。教案は重要な評価対象で、評価のポイントは a) 全ての作成上の注意が確実に守られているか、b) メッセージ性のある、明確な目的（歴史的意義等）が設定されているか、c) 十分な教材研究を行い、テーマの本質を理解した構成になっているか、d) 生徒の興味、関心を引く創意・工夫がなされているか、e) 主体的参加、言語活動、知的発見の場面が設定されているか、f) 説明中心ではなく、教材を通して学び取らせる構成になっているか、g) 板書は構造化され、分かりやすいか、h) 展開や教材が、平均的な学力の生徒にとって適切か、であることを明示しておく。

③では具体的な授業のスキルを、下記の教材を通して学ばせる。

授業のスキル

[1] 授業目標

1) メッセージ性…十分な教材・学問研究に裏打ちされ、かつ自分の考えに基づいたメッセージ（最も生徒に理解して欲しいこと）が設定されているか。授業者側に、テーマにかかわる強い問題意識や批判精神が不可欠

2) 目標の明確化…導入で、本時の学習内容や目標が示されていない授業は、表紙と目次のない本をいきなり1ページから読ませるようなもの。(終わった時点で明かになるという方法もある)

3) 展開手法との関連…展開手法は目標に即した適切なものとなっているか

4) 目標の達成度…本時の目標が達成され、メッセージを生徒に学び取らせることができたか

[2] 教材研究と授業構成

1) 教材研究…広範で、深い教材研究に裏打ちされた、信頼感あふれる授業となっているか。(1を教えるのに10の知識と理解が必要。10を知って2を教えてもいけない)

2) 授業構成…生徒を動かす授業(新たな発見、知る喜び、できるようになる喜び、深い洞察に導くような授業)構成になっているか。目的が達せられるように、教材の提示、発問、指示等が周到に構成されているか

3) 生徒の主体的参加…生徒が受け身で板書を写し、説明を聞くだけではなく、なんらかの形で主体的に参加する場が設定された構成になっているか

[3] 話し方

1) 生徒の顔(目)を見て説明…黒板や資料を見ながら説明していないか。資料を見ないと説明できないような中途半端な知識で教えてはならない

2) 演説と会話の融合…演説をする時のように、全員に向かって堂々と自信に満ちた態度で、なおかつ特定の相手と会話をしているように、問いかけ、相手の表情に答えるように話しているか

3) 説明の分かりやすさ…抽象的な説明だけでなく、具体的な事例を交えて説明しているか。解説なく専門用語を使ってないか

4) 声の大きさと早さ…教室の一番後ろでも充分に聞こえるだけの声がかでているか。話す速さは適切か

5) めりはり…抑揚やめりはりのない単調な話し方になっていないか

6) 言葉遣い…粗野な言い方や丁寧すぎて距離感のある話し方になっていないか、生徒の年齢相応の言葉遣いができているか

7) 説明、発問、指示、示範、助言の別が明確か

[4] 発問

1) 回数…普通の授業では3～8回が適当

2) どの時点で何を何のために(場面, 意図, 目的)…共通理解しておくべき事項を発問しているか。テーマの本質に迫る思考を引き出すような発問をしているか。生徒の思考を揺さぶる発問をしているか(本質的な発問=なぜ?何?)

3) 具体性…発問の内容と意図が確実に伝わるように, 具体的に, 分かりやすく発問しているか。

4) 生徒の応答への対応…生徒の応答の全てを想定し, 間違ったり, 答えられなかったときのために, 修正発問やヒントをしっかりと準備しているか。生徒の答えを, たとえ間違っていたとしても大切に扱っているか

5) 指名の仕方…特定の生徒に集中していないか(場合によっては, 特定の生徒向けの発問もある)

[5] 板書

1) 構造化…完全な文章や, 逆に用語のみの板書ではなく, 番号や記号による分類, 字下げ, 関連事項結線, 因果関係の矢印表示, 対比表化などによって構造化された板書になっているか。

2) 授業の再構成…生徒が後でノートを見て, 1時間の授業の流れとポイントをたどって, 授業を再構成できるような板書になっているか。板書していないことでも, 理解を深めるのに必要だと想えばメモさせる訓練も必要

3) 分かりやすさ…重要事項や分類などでの色分け, ノート転記事項と, 説明補助用のメモ書き分けなど

4) 板書量…2回黒板を消す授業は, ほとんどの場合, 生徒に考えさせることのない一方通行の授業

5) ノート転記完了の確認…場合により板書を中断させて説明に注目させる。早く転記する訓練も必要

6) 速さと読みやすさ…板書の速さは適切か。字は読みやすいか

[6] 資料の収集と教材作成

1) 教材化の努力…原資料はデータや fact (事実)。授業目的に照らして, 効果的な利用場面と提示方法を熟慮した上で, 提示できる状態に仕上げたものが教材。授業は, 食材を加工した個別料理を教材として, 提供順序を考えて構成するコース料理である。

2) 内容…興味・関心を引きつけられるか。深い理解に導くことができるか。テーマの核心に迫れるものか

3) 資料収集…既成の生徒用資料集のみに頼るのではなく、広範な収集の努力がなされているか

4) 分かりやすさ…生徒の理解力に応じた内容になっているか

[7] 教科書の利用

1) 利用の度合い…ほとんど全て読んだり読ませたりするなど、頼り過ぎていないか

2) 読み方の指導…教科書を音読させる場合、読み方をしっかり指導しているか

3) 教科書の資料の利用…図版等を適切に利用しているか

[8] その他

1) 学習管理の適切さ…生徒の授業に取り組む姿勢を確認し、しっかり取り組ませる努力が行なわれているか(忘れ物、ノート転記、私語、課題への取組み状況などへの対応)。机間指導

2) 生徒の集中度…生徒が集中して取り組めるような展開になっているか

3) めりはり…単調で変化のない授業展開になっていないか(教壇上での移動や身振りでも変化が生まれる)

4) 時間配分…重要度に応じて時間配分された展開になっているか

5) 進度は適切か

6) まとまり…導入、展開、まとめが明確で、全体としてまとまりがあるか

これは、いわば筆者の高校での28年間の経験から、授業のスキルの本質に関わる部分を抽出したものである。また、これは「授業作りのポイント」とともに、後におこなうビデオ授業研究や、「教育の技術と方法」、「教育実習Ⅰ」などで実施する模擬授業の評価の基準ともなるものであることを理解させる。

上記授業構成の④⑤⑦⑧⑨⑩はGW形式、またはビデオやプリント教材をもとにWS記入後GDをおこなう形式である。④ではWSの9人の生徒を、地歴科の学力の観点でダイヤモンドランキングする。

⑤の目的は、上記の授業構成の中で最も重要なのが原因であり、現代的な課題の原因は複雑多様で、その理解には深い教材研究が必要なことを学び取らせることである。特定の国々で異様に男性人口が多いのはなぜか、ある開発途上国の首都にあるスラムの解消を目指して、政府が郊外に大きくはないが電気、水道、トイレのある住宅を建設し、無償で供与して移住させたが、1-2年の

うちに多くがその住居を棄てて元の場所にまたスラムを作り始めたのはなぜか、地図上で示した国で飢餓が起こった原因何か。受講生が考えたこともない人口問題の原因を、既存の知識から考える難しさ、スラムの否定的イメージしか持たない学生がスラムのメリットを考える難しさ、飢餓の原因として紛争や不利な自然条件などのイメージしかない学生が、言論の自由の剥奪や多くの食糧があるにもかかわらず貧富の格差が大きいことが飢餓の原因になることを想像することの困難などから、教材研究の重要性を学び取らせる。

⑥では、次期高校学習指導要領で必修科目となる「地理総合」でGISが必須となることに鑑み、最低限度のGIS知識とそれを授業で実践するスキルを身につけさせるためのもの。いくつかのWeb-Gisとスタンドアロンのカシミールなどを紹介した後、スマートフォンにGPSロガーアプリを入れて15分以上歩行した軌跡の地図、駿河台大学周辺のOpen Street Mapに対象物を2つ以上登録した画像をメール添付で提出する課題を課した。

⑦ではビデオを見て、日本の教育との違いをGDさせる。メディアの意図を読み解く課題では、GWで新聞の写真を分析して発表する、発禁本の課題では、メディア規制の可否や容認レベルなどをGDした後自分の意見を構成し発表するなどの内容で、いずれも教師は何も教えないしまとめもしない。これが社会構成主義の教育で、それこそがPISAで最高点を生む教育方法であること学び取らせる。

⑧～⑩では、生徒参加型教材を実際に体験してみて、そのメリット、デメリットをGDすることにより、さまざまなタイプの参加型教材を利用したALのスキルを身につけさせることが目的である。⑨⑩は刊行されているものを改編した。ゲームでは、生徒が、偶然性が遊牧生活に大きな影響を及ぼすような印象を受けやすいが、社会的にはそれらの出来事がどのような原因で起こったのかの方がむしろ重要であることをフォローする必要性を指摘する。たとえば、「ツェツェバエ退治のキャンペーンが、政府によって行われる。死ぬ牛はなし」という出来事は、選挙のためのポピュリズム政策として行われたのか、国民の生活を重視する政府が、軍事費を減らして回したのか。またシミュレーションゲーム故の捨象や現実からの乖離がありそのフォローも必要であることも指摘。たとえば、現実の遊牧民の移動ルートはほぼ決まっており、毎月どちらの方向に移動するかを決めているわけではないなど。

⑩～⑬では、筆者が作成した教材で GW を取り入れながら、教材メディアの特性を生かした教材作りの実際を学び取らせる。黒板とチョークでは、南アジアにおける降水量の季節的変化を、説明する順に地形、気圧配置、風向、多雨地帯などを順次カラーチョークで書き加えたり消したりしながら板書して示す。ここではとくにカラー表現、推移的表現、加筆消去の容易さという長所に加え、手書き模造紙教材の貼り付けなどの特異な利用も示す。またプリント教材では、楔形文字解読のきっかけとなったペルセポリスの王墓碑文の教材を提示し、ヒスタスパス（ヴィシュタスパヤ）→ダレイオス I 世（ダラヤバウシュ）→クセルクセス（ハシャヤーラシャ）の王名解読を行わせ、授業展開の実例を示す。実物教材では、筆者所有のものを持参し、触れ匂いを嗅ぎ場合により食べるといった、五感の全てで捉えられるという最大の特徴を生かした提示の仕方を示し、実際にインドの紙幣を使った授業展開例を実演する。音声教材では、歴史書からシナリオを作り、BGM をミキシングして自作したロシア農奴の教材を流しながら穴埋めプリントに記入させ、作り方、利用法を実演する。PC では、有用 HP、デジカメ写真、スキャナーと OCR ソフトなどでの資料収集、ワープロにハイパーリンクを張ったプリント兼マルチメディア教材、HP 作成ソフトによるコースウェア教材の作成例を紹介する。

⑭⑮では、ベテランの教員の実践ビデオを見て、ワークシート（小レポート）に参考になった点、改善した方がいい点を「授業作りのポイント」、「授業のスキル」を参考に記入し、数行で自分が学び取ったメッセージを記述した後 GD する。ベテラン教員の授業評価をしっかりとおこなう作業を通じて授業作りの能力を育成できると考える。

9) その他の教職に関する科目

そのほかに担当したのは社会科教育法、教育の方法と技術、教育学演習 I・II、教育実習 I（持ち回り）、教育実習 II（持ち回り）、教職実践演習（持ち回り）であるが、紙数の関係もあり簡単に記しておく。社会科教育法は中学の教科教育法で、内容は違うが構成や展開手法は社会科・地歴科教育法 I とほぼ同じである。教育の方法と技術は全教職履修生が対象なので、教科教育法と同様の授業作りのポイントや授業のスキル、教材作り、情報機器の利用など以外に、英語の塾講師から学ぶビデオ、体育の教員の講演、模擬体験型教育法の例として「青い目茶色い目」というビデオをみて関心を持った点などを小レポートに記

した上でGDする。模擬授業もおこない、それを受講生と筆者が評価する。教育学演習は現代の教育問題を考えるというテーマで、Ⅰでは教育に関するドキュメンタリーを見ての討論、教育に関する新書などをテキストとしてレジメを作成して輪読発表してもらい討論をおこなう。Ⅱでは、やはりビデオを見ての討論と、自分が興味関心を持った教育問題の新聞記事を輪番でレジメを作成して発表してもらい討論する。受講登録していない教職希望者が参加することもあった。教育実習Ⅰでは実習の事前指導を行い、教育実習Ⅱでは教育実習を担当した。教職実践演習は、文科省が授業モデルを示しているのほぼそれに従って展開するしかなかった。

おわりに

駿河台大学は、筆者にとって最も長期の勤務先となった。立地環境もすばらしく、元加治から歩いて通う途中の入間川では孤高の鷺がじっと獲物を狙い、雉の鳴き声が河岸に響き、研究室からは富士山の山頂部が望め、加治丘陵の紅葉が錦絵のように広がった。また、駿大・地域フォーラム活動、実習校訪問に飛び回った教職指導、在外研究など多くの新たな経験をし、駿河台大学が自分の職業人生最後のそして最大の舞台となったことは間違いない。

最後に、筆者に最後の働き場を与えていただいた大学経営者と採用に関わって下さったみなさま、また筆者の本学での教育活動を支えて下さった教職員のみなさま、教職の仕事でお世話になった実習受け入れ校や教育委員会のみなさま、筆者の授業要請を快く引く受けていただいた非常勤講師の先生方、さまざまな相談にのっていただいた友人のみなさま、授業や活動を通じて筆者に新たな学びをもたらしてくれた学生諸君、よき相談相手、助言者として支えてくれた妻香織に心から感謝申し上げます。